



ピアソン・カレッジで出会った
カナダ人の親友と(左が筆者)

米国やアジア各国からの同級生を前にすると、原爆について何をどのように語ればいいのかさっぱり分からず、結局は一言も発しなかった。「もし発言を求められていたら、きつと何も言えずに恥をかいたことだろう。ああ、そんなことにならずによかった」というのが、私の安堵の正体だった。

旧東ドイツから来た同級生に、「君には共產主義国家の警察の恐ろしさなんて分からないだろう」と言われた時も、「両親の離婚を知ってルームメイトが泣き崩れた時も、私は何を言えばよいのかわからずただ黙り込んでいた。語るべき言葉がない。そして表現する言語能力もない。ピアソン・カレッジでの二年

間はそんな自分の空っぽさを思い知らされた日々だった。

♪ ジャーナリズムの道へ

そんな私がどうして「言葉」を発信する仕事を選んだのか。きっかけはピアソン・カレッジ卒業後、大学三年生の夏に訪れた旧ユーゴスラビアだった。漠然と国際機関で働きたいと考えていた私は、内戦から逃れた避難民の支援を行うNGOのスタディーツアーに参加した。内戦、空爆という言葉は知っていても、それが表す現実は何一つ知らなかった私は、そこで初めて内戦の一つの側面に触れた。知り合い同士だった人たちが、一つの町の、一つの街角をめぐって、憎しみや引き裂かれそうな気持ちを抱えながら銃撃戦を繰り返している一方、空爆の煙幕の下では、子どもたちがおびえながらも食事を取り、歌を歌い、家族で愛を育んでいたと知った。その時、「知っていると思っているけど、本当は知らないことを知りたい、そしてそれを伝えられるようになりたい」と思い、ジャーナリズムの道に進むことを決めた。

♪ 力のある言葉で伝えるために

大学卒業後、NHKに入局して四年間は、

大分放送局で地域放送に携わった。大分の山間部や漁師町、温泉街を走り回ってたくさんの人と出会い、知っていると知っていた日本をあらためて学んだ。日本は奥が深く、豊かであると同時に大きな問題も抱えていることを知った。私生活ではその後、二人の子どもに恵まれ、母として人を育てることの難しさとも格闘している。

時折、ピアソン・カレッジに行かずに、日本の高校にそのまま通っていたらどうなっていただろう、と考えることがある。おそらくそれはそれで、充実した高校生活を送っていただろう。けれど、ピアソン・カレッジで空っぽな私に出会ったからこそ、その穴を埋めようともがく力を得た。この体験が取材をし、原稿を書く際の私の原動力になっている。まだまだ語れる言葉は少なく、知らないことも多いが、これからも少しでも力のある言葉を発信できるよう、日々精進したい。

最後になるが、貴重な二年間を与えてくれた皆様に感謝申しあげるとともに、世界の高校生と共に悩み、学ぶというかけがえのない経験を日本の高校生に与えてくれるUWC奨学金の支援をこれからもよろしくお願い申しあげたい。

語るべき言葉を求めて

NHK国際放送局ディレクター

新見 蒔



一九九五―一九七七年UWCピアンソン・カレッジ(カナダ)留学。二〇〇二年京都大学法学部卒業。NHK入局後、大分放送局、青少年教育番組部を経て二〇一〇年から国際放送局で番組制作を行う。

「アッサラームワライカム、ケモナチエン？」
これが、毎朝私が職場で交わすあいさつだ。
私は今、NHKの国際放送局で海外向けのラジオ放送のディレクターをしている。あまり知られていないが、NHK国際ラジオ(Radio Japan)は七八年の歴史を持ち、英語やアラビア語などの一七の言語で日本のニュース、文化、社会の動きを世界に向けて放送している。私はバンングラデシュ、インド向けのベンガル語放送を担当しながら、一七言語で放送されるリポートをディレクターとして制作している。同僚はバンングラデシュ人、隣にはベトナム人が座っており、まるでUWCのピアンソン・カレッジが職場になったような場所だ。
東日本震災以降、日本がどう復興してい

くのか、原子力政策はどうなるかなど、世界からの関心が集まっており、緊張感を持って取材、制作にあたっている。ラジオというメディアは映像で伝えるテレビに比べて情報量も演出方法も限られ、すべてを言葉で語らねばならない。語るためには現場を取材し、各分野の専門家から話を聞き、自分のなかに「生きた言葉」をため込まなければならぬ。特に、世界のリスナーにメッセージを伝えるためには力のある言葉が必要だ。振り返ってみると、「生きた言葉」を追い求める原点はピアンソン・カレッジ留学中にあったと思う。しかし、それは輝かしい体験によってではなく、空っぽな自分を思い知らされた、という意味で。

空っぽな自分を知ったUWC
ピアンソン・カレッジに入学して間もないころ、全校生徒を対象に原爆についてのワークショップが開かれた。広島出身の私にとって、見慣れた被爆者の写真がスライドで映し出され、幾人かの人が発言してワークショップは終わった。ワークショップから部屋に戻る途中、出くわした先輩の坪内南さんが、「広島出身の蒔に意見を聞いたら」って言うかと思ったけど、やめといたわ」と何気なく言った。その時、私の心をよぎったのは悔しさでも情けなさでもなく、安堵だった。被爆者の父を持ち、平和教育をたっぷり受けて来た私は、ワークショップの間中、「何か言わなくては」と考えてはいた。しかし、いざ

●ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会
UWCは、世界各国から選抜された高校生を受け入れ、教育を通じてグローバル人材を養成する国際的な民間教育機関(本部 ロンドン)。UWC日本協会は、UWC活動を日本で普及させるため、経団連の全面的支援のもとに設立され、UWCに派遣する高校生の選考や奨学金の支給等を行っている。奨学金は、UWCの趣旨に賛同する経団連主要会員企業等からの寄附金を原資としており、企業の社会貢献活動として、UWC日本協会へのご入会を検討いただきたくお願い申しあげる。